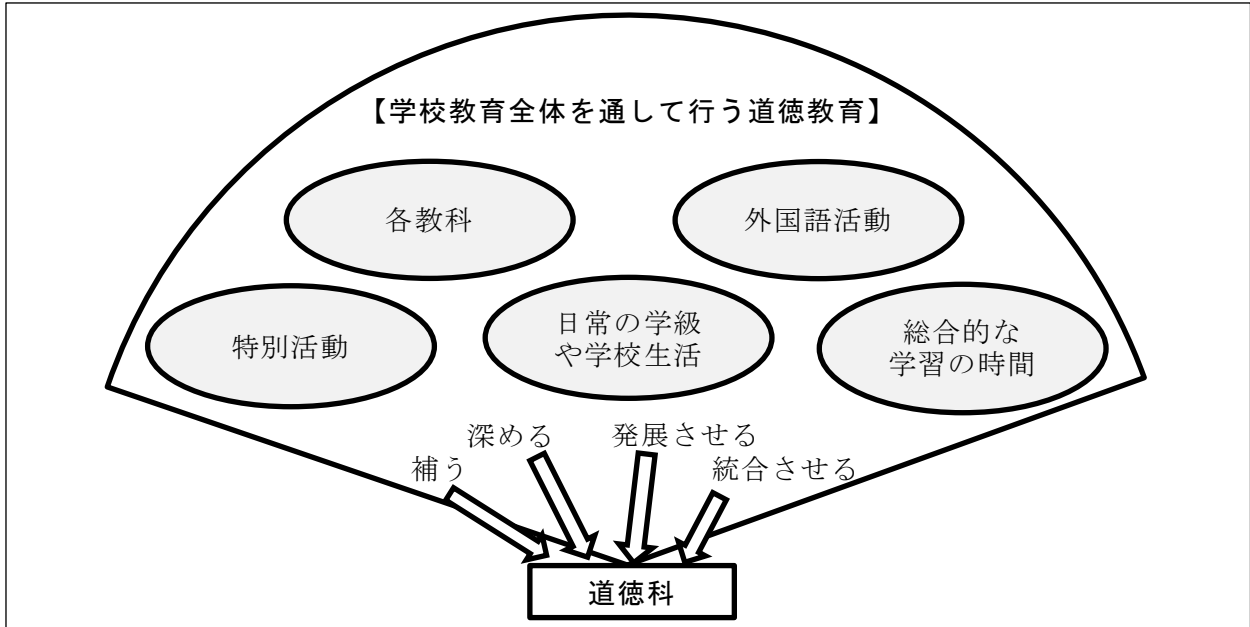


道徳科の授業を構成する手立て

1 教育課程編成の一般方針

道徳教育は、学校や児童生徒の実態などを踏まえ設定した目標を達成するために、あらゆる教育活動を通じて、適切に行われなくてはならない。その中で、道徳科は、各活動における道徳教育の要として、それらを補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させたり統合させたりする役割を果たす。



小学校の時期においては、6年間の発達の段階を考慮するとともに、幼児期の発達の段階を踏まえ、中学校の発達の段階への成長の見通しをもつ

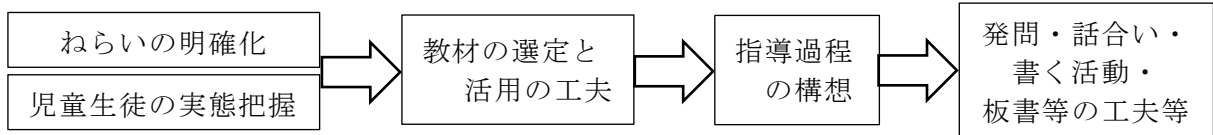
中学校の時期においては3年間の発達段階を考慮するとともに、特に中学校に入学して間もない時期には小学校高学年段階における指導との接続を意識しつつ、また学年が上がるにつれて高等学校等における人間としての在り方生き方に関する教育への見通しをもつ

道徳科においては、発達の段階を前提としつつも、指導内容や指導方法を考える上では、個人としての特性等から捉えられる個人差に配慮することも重要となる。児童生徒の実態を把握し、指導内容、指導方法を決定してこそ、適切に指導を行うことが可能となる。

2 道徳科の指導

(1) 道徳科の授業に取り組む基本的な構え

道徳科の目標を達成するために、下図のような検討を踏まえ、授業の構想を立てる必要がある。その際には、道徳教育推進教師や他の教師と相談したり協力したりして授業に取り組むことも大切である。



(2) ねらいの明確化

年間指導計画に示されている主題名とねらいを確認し、そのねらいを基に、学級の児童生徒の内面を見つめ直し、各教科等での指導との関連を検討して、何を指導していくのかを明確にしていくことが重要である。

(3) 児童生徒の実態把握

道徳科の授業を行う際に、学級担任として、児童生徒一人一人のよさを発見し、その道徳性の発達段階について正確に把握しておくことが肝要である。実態を把握する方法としては、

生活場面での観察，道徳授業での観察，日記や作文等の生活記録の読み取り，調査，カウンセリング，検査などが考えられる。

(4) 教材を吟味する

教科用図書や副読本等の教材について，授業者が児童生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討する。

道徳科においても，主たる教材として教科用図書を使用しなければならないことは言うまでもないが，道徳教育の特性を鑑みれば，多様な教材を併せて活用することが重要となる。教材は，児童生徒の考えを深めさせるための手がかりとなるものであり，児童生徒と指導のねらいを結び付ける媒体となる。教材を選択する際には道徳科の目標を踏まえ，児童生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり，感動を覚えたりするような充実した教材開発や活用も大切である。

教材について，ねらいとのかかわりで道徳的価値がどのように含まれているかについて検討する際には，指導者自身が，教材の構造や表現の意図，そこに含まれる道徳的価値や人間性を深く理解することが大切である。

【道徳科に用いられる教材の具備する要件】

- ・児童生徒の発達段階に即し，ねらいを達成するのにふさわしいものであること
- ・人間尊重の精神にかなうもの
- ・悩みや葛藤等の心の揺れ，人間関係の理解等の課題も含め，児童生徒が深く考えることができるもの
- ・人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるもの
- ・多様な見方や考え方のできる事柄を取り扱う場合には，特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないものであること

【教材開発と活用の視点（例）】

- ・生命の尊厳を題材にした教材
生命ある全てのものをかけがえのないものとして尊重し，大切にすることを考えられるようなもの。中学校ではさらに，人間としての生き方と関わらせながら考えられるもの。
- ・社会参画を題材とした教材
「個」から「公」に視点を広げていく背景として「他者」への思いやりの心に触れたもの。
- ・自然を題材にした教材
自然の美しさや偉大さ，不思議さなど，感性に訴えるもの。中学校ではさらに，人間の力を超えたものを謙虚に受け止める心を育てるもの。
- ・伝統と文化を題材とした教材
有形無形の美しさに国や郷土への誇り，愛情を感じさせるもの。
- ・先人の伝記を題材とした教材
多様な生き方が織り込まれ，生きる勇気や知恵などを感じることができるとともに，人間としての弱さを吐露する姿などにも接し，生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めるもの。
- ・スポーツを題材とした教材
オリンピックやパラリンピックなど，世界を舞台に活躍している競技者やそれを支える人々のチャレンジ精神や力強い生き方，苦悩などに触れて道徳的価値の理解やそれに基づいた自己を見つめる学習を深められるもの。
- ・情報化への対応等の現代的な課題などを題材とした教材
単に情報機器の操作や活用など，その注意点を扱うのではなく，活用するのは人間であるからこそ，例えば「節度，節制」や「規則の尊重」，「自主，自律，自由と責任」など関わりのある道徳的価値について考えを深められるもの。

(5) 学習指導過程の構想（読み物教材を使った基本的な指導過程）

段階	ねらいと指導内容	指導上の留意事項
導入 5 付け	○ねらいへの方向付けをする。 ・ 価値への方向付け ・ 教材への方向付け ○学習への興味、関心を高める。	○価値への方向付けと教材の方向付けのどちらか一つを行えばよい。 ○教材によっては、方向付けを必要としないものもある。 ○経験の話し合いやアンケートの活用、視聴覚教材の提示などの工夫もある。
展開 前段 25 ～ 30 把握	○教材を通してねらいとする価値を追求し把握させる。 ・ 簡潔に「あらすじ」を確認する。 ・ 教材をもとに、主人公等の思いや考え方に共感させる。 ・ 級友の価値観と照らし合わせることで、自分の感じ方や考え方の位置を知らせ、自分の価値観を深化させる。	○中心教材の提示を工夫する。 [教材を提示する工夫] ・ 読み聞かせ、範読、紙芝居、影絵、人形やペープサートを生かした劇、ビデオ映像 など ○教材は一度に見せて、全体を見通ことを原則とする。 ○価値の把握の段階は、本時のねらいとする道徳的価値観に対する児童生徒の道徳的心情について評価しやすい。
展開 後段 10 ～ 15 自覚	○価値の内面的自覚を図る。 ・ 展開前段で資料を用い多様な価値観にふれ、高められた価値観で自分の在り方や生き方と関連させて見つめさせる。	○教材から離れて、自分の過去及び現在を素直に振り返らせたい。 ○教材から離れる際には、スムーズに移行させたい。 ○価値の自覚の段階は、児童生徒の道徳的実践意欲・態度や道徳的判断力について評価しやすい場面である。
終 末 5 め	○ねらいとする価値について整理してまとめをする。	○ねらいとする価値について、本時の話し合いだけでは十分でない点についての補足をするときもある

(6) 読み物教材を活用する場合の考え方

① 活用類型

読み物教材の活用を図る一つの考え方として活用類型がある。活用類型と活用の方法は、以下の表のようになる。いずれの活用類型においても、児童生徒が主人公等の行為を第三者的に客観的な視点から批判したり、気付いたりしたことや読み物教材に書いてある表面的な内容だけを話し合うような授業になることのないよう、十分な配慮が必要である。そのためには、批判的活用をする場合でも、主人公等の思いや考え方に十分共感することを通して生まれた児童生徒の心の揺れや対立を引き出すことが大切である。

[資料の活用類型と発問のかたち]

活用類型	活用の方法	発問のかたち
共感的活用	主人公等の考え方、感じ方に共感させることによって、自分の現在の価値観に気付かせ自覚を促す。	・ そのとき主人公はどのような気持ちだったろう。 ・ そのとき主人公は何を考えていただろう。 ・ そのとき主人公は何を悩んでいたろう。
感動的活用	教材が深い感銘を与える場合、生徒の感動を特に重視しながら、ねらいとする価値把握を図る。	・ 心に残ったところはどこだろう。 ・ なぜそこが心に残ったのだろう。 ・ なぜみんなを感動させるのだろう。
範例的活用	主人公等の行った道徳的行為を、	・ 手本にしたいところはどのようなと

	児童生徒に一つの手本や範例として受け取らせる。	ころか。 ・見習いたいところはどのようなところか。 ・どうしてこんな立派な行為ができたのだろう。
批判的活用	主人公等の行為や考え方を児童生徒に批判させ、互いの意見を交わすことにより道徳的な考え方、感じ方を深めさせる。	・このときの主人公の考えをどう思うか。 ・この主人公の行為をどう思うか。 ・この行為をした主人公をどう思うか。

道徳科の授業では、教材を使って、自己を見つめさせ、内面から自覚させることが基本である。つまり、読み物教材の場合、登場人物に自分を重ねて語るができる発問が原則である。特に小学校段階では共感的活用が中心となる。発達段階に応じ、批判的な見方を含めた展開にするような指導の工夫もあるが、展開前段では「そのときの登場人物はどんな気持ちだっただろう」「そのときの登場人物はどんなことを考えているか」という発問を基本とする。

また、読み物教材の活用の工夫として、ねらいにせまるために時間や児童生徒の実態を考慮した付け加え、削除、修正や難解な部分や場面の解説などについても準備する必要がある。

② 発問の工夫と構成

ア 道徳の授業の流れと発問の構成

方向付け → 教材の範読(あらすじの確認)・提示 → 基本発問 → 中心発問(補助発問) → 価値の把握の発問 → 価値の自覚の発問 → 価値の自覚の発問 → まとめ

イ 発問の工夫

発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。

- ・考える必然性や切実感のある発問
- ・自由な思考を促す発問
- ・物事を多面的・多角的に考えたりする発問
- など

ウ 発問の種類

<p>【基本発問】 人間関係を確認したり状況を把握したりする、中心発問の一助とする補助的な発問である。 基本発問は、発達段階や教材の複雑さにもよるが、1～2問とする。</p>
<p>【中心発問】 本時のねらいとする価値に迫るための多様な価値観を引き出す発問である。 中心発問では、一人一人の児童生徒に教材の主人公等に自己を映し出させ、多様な感じ方や考え方を引き出す。中心発問は、主人公等が「ねらい」とする価値を十分把握しきれずに、悩み、苦しむ場面に設定する場合が多い。</p>
<p>【補助発問】 中心発問における児童生徒の反応は多様であっても思いつきであったり、きれいごとやたてまえであったりすることが少なくない。また、類型化された価値観に出会うことによって、新たに価値観の変化が生じてくることもある。 こうしたタイミングをとらせ、本時のねらいにせまるために、本音を引き出し、考え方を深めるためにする、掘り起こしや切り返しの発問である。</p>
<p>【価値の把握の発問】 本時のねらいを把握することができる発問である。 中心発問と補助発問に対する話し合いで価値観を高め価値を把握させるのが望ましい。しかし、容易ではないので価値の把握の発問を用意する。</p>

<p>価値の把握の発問では、主人公等が本時のねらいとする価値に気付き、よりよく生きていこうとする気持ちに共感させ、児童生徒一人一人の中でその価値観が高まるようにする。</p>
<p>【価値の自覚の発問】 本時に学んだことを通し、今までの自分自身を振り返る発問である。 展開前段で教材を用いて多様な価値観にふれ、高められた価値観で自分の在り方や生き方と関連させて見つめさせる。</p>

エ 発問例

段階	発問例
導入	<p>(導入例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○価値への方向付け 「どんなときに礼儀の大切さを感じますか」 ○教材への方向付け 「この写真の人たちは何をしているところでしょう」
展開前段・把握	<p>(基本発問の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒に人間関係を把握させたいとき 「主人公が友達に誘われたとき、どんな気持ちでしたか」 ○児童生徒に状況を把握させたいとき 「そのとき主人公は、どんなことを考えましたか」
	<p>(中心発問の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○多様な価値観を引き出す 「そのとき主人公は何を悩んでいたと思いますか」 「このとき主人公はどんな気持ちだったでしょう」 「主人公は家に帰ったあと、一人になってどんなことを考えていますか」 「～の心の中はどんなだったかな」
	<p>(補助発問の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○同じような意見や考えが続くとき 「だれもがそんな気持ちになれるのかな」 ○児童生徒の感じ方や考え方を一層深めるとき 「そういう思いだけかな」「本当にそれでよかったのかな」 ○表面的な意見を掘り下げたいとき 「先生を相手だと思って実際に謝ってごらん」 ○児童生徒の視点を変えたいとき 「でもそのとき、主人公の母親はどう感じていたでしょう」 ○話し合いを焦点化させたいとき 「なぜそんなことをしたと思いますか」 ○児童生徒が今まで意識していなかった感じ方や考え方を引き出すとき 「じゃあ、どんな気持ちから主人公は～をしたのでしょうか」 ○学級全体で議論したり練り上げたりしたいとき 「～さんの言ったことについて、みんなはどう思いますか」
	<p>(価値の把握の発問の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ねらいとする価値に気付き前向きに行動している主人公等に共感させる 「主人公は黙って荷物を持ちながら、どんなことを考えていたでしょう」
	<p>(発問で注意したいこと)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●基本的には主人公の心情を問う。 ●一問一答的な発問は避ける。 ●登場人物の心情を問うことばかりの繰り返しにならない。 ●登場人物に対して共感することなく、第三者的に批判させない。

展開後段	価値の自覚	(価値の自覚の発問の例) ○成功体験を想起させるとき 「進んで仕事をしたことが、他人や社会のために役立ったと思えたことはありませんか」 ○失敗体験を想起させるとき 「きまりを考えずに行動し、周りに迷惑をかけたことはありませんか」 ○じっくり考えさせたいとき 「自分の経験を交えながら、主人公へ手紙を書いてみよう」 (発問で注意したいこと) ●決意表明を促すのではなく、自己を深く見つめることができるように導く。
終末	まとめ	○教師の説話・体験談，視聴覚資料，詩や格言などを活用し，余韻が残るようにまとめる。 ○失敗談や心の葛藤，感動したことなど教師自身のことについて語ることは，児童生徒との人間関係を築く上でも，共に悩み学ぶ姿勢を示す上でも有効である。

(7) その他，道徳科に生かす指導方法の工夫

① 話し合いの工夫

- ・児童生徒相互の考えを深める中心的な学習活動であり，道徳科においても重要な役割を果たす。考えを出し合う，まとめる，比較するなどの目的に応じて効果的に話し合いが行われるよう工夫する。
- ・話すことと聞くことが並行して行われ，友達の見方についての理解を深めたり，自分の考えを明確にしたりすることができる。

② 書く活動の工夫

- ・児童生徒が自ら考えを深めたり，整理したりする機会として，重要な役割をもつ。
- ・自分自身とじっくりと向き合ったり自分なりにじっくりと考えたりすることができる。
- ・1冊のノートなどを活用することによって，学習を継続的に深めていくことができ，児童生徒の成長の記録として活用したり，評価に生かしたりすることもできる。

③ 動作化，役割演技等の表現活動の工夫

- ・児童生徒に特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技の工夫
- ・動きやせりふ，言葉を模倣して理解を深める動作化の工夫
- ・音楽，所作，その場に応じた身のこなし，表情などで自分の考えを表現する工夫 など

④ 板書を生かす工夫

- ・教師の伝えたい内容を示したり，その順序や構造を示したり，内容の補足や補強をしたりするなど，板書は多様な機能をもっている。
- ・思考の流れや順序を示すような順接的な板書，違いや多様さを対比的，構造的に示す板書，中心部分を浮き立たせる板書などの工夫が大切である。

⑤ 説話の工夫

- ・説話とは，児童生徒がねらいの根底にある道徳的価値を一層主体的に考えられるようにするものである。
- ・教師の体験談や願い，様々な事象についての所感，日常生活における問題や身近な話題，関心や視野を広げる時事問題，ことわざや格言，心に残る標語，地域の自然や伝統文化に関することなどが考えられる。